

嗚呼八王子城（高澤寿民）

怒涛の敵 暁に 城山を 囲む

業火 天を 焼き 草木を 払う

北条の 史編 灰燼に 帰す

敗将の 子女 何処に 有り

鎮魂の 笛 颯々と 峰を 渡り

下弦の 月 淡く 老松に 懸かる

関東の 栄華 一朝の 夢

戦国 遙かなり 四百 星霜

解説 八王子城は北条氏の本城である小田原城の支城であり、関東の西に位置する軍事上の拠点であった。八王子城は天下統一を進める豊臣秀吉の軍勢一万五千に攻められ北条氏は敗北し、城主の北条氏照は兄、氏政とともに切腹した。のちに新領主となった徳川家康によって八王子城は廢城となった。この詩は廢城四百年後に作られた。

語釈 ※怒涛 〓はげしい勢いで押し寄せるようす。 ※城山 〓東京都 八王子市にある標高四四六呎の山でその他の城山と区別するために八王子城山とも呼ぶ。 ※業火 〓激しい炎や大火のたとえ。 ※灰燼 〓建物などが燃えて跡形もないこと。 ※鎮魂 〓魂を落ち着かせしずめること。 ※颯々 〓長くしなやかなさま。 ※下弦 〓左半月状に見え、東半分が輝いてみえる月。 ※星霜 〓としつき。 歳月。

通釈 激しい勢いで押し寄せる敵は、明け方に塩山を囲み、火を放ち草木を焼き払った。北条の歴史は跡形も啼く消え去った。戦いに敗れた武将そして子女達は何処に行ったのか。誰が吹いているのか鎮魂の笛の音が峰峰から聞こえ、ふと回りを見渡すと、月の光が薄く老いた松の木にかかっていた。関東で猛威を揮った北条も夢の如く消え、四〇〇年前の戦国時代は遙か昔となった。